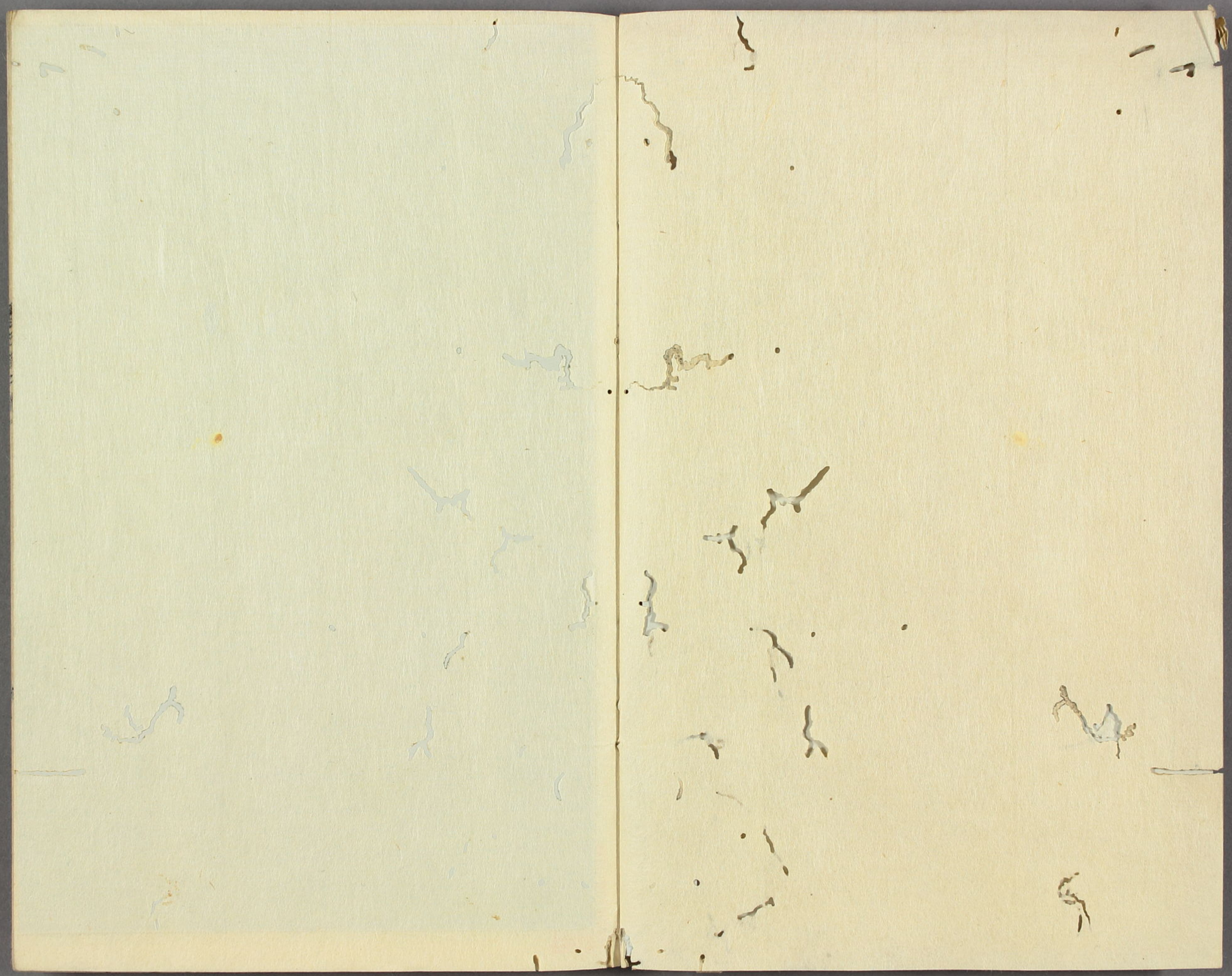
羣書類從

五百二十一

あしたの雲
宗祇終焉記
園齊弟子記

伊地知文庫
文庫20
358
9



文庫20
358
一
9

群書類從巻第五百二十一

伊地知氏書冊

雜部七十六

檢校保己一集

巻五百二十一

改弘の御願にて行うなり高野ごもりの門ふめく
雖勝王経ちさとせんかあさとをもとへのくに
まゐりれ名こうれあるのけうきやうあこ
やまとたちの業ふこと侍をめしぬるこて
れをもきまもをもつて風身ふんとをもて
仁徳世をもてれ侍ひしに明應四年初の秋
ようるれ侍るうしあのあるこを
やうかこあさこあまはうををもひ侍る
かとて日比あらはをこきうこはに
つてかうこうゆくさるふ侍ってへく雖見

侍大法秘法経験せんあこるをもとをえ
いとふこ侍まとをを着婆う療晴明う術のりかハ
すやちをん去月れ中の八日の秋つるもむる
くうあ侍うぬ人くあ〜ををになるけう心すもひ
もをとうあり堪慢れをとの秋まれかけき
をうををこれあううあまをやうそうれ
暁風つあふうれてうう侍ふに遣をう
行うあをれ月うにくのりけ物ふををふ祇
こをこうこれああ〜をうをいちんうこあ〜をう
おさめ侍うをハ世二日れあをうこ成へうれるの

うしろ九山の山ふもとの法ゐ寺にて
けを記道かとつ者とて九ゐと有りかれへしこ
ゐてさと里毎へ入ゐ山ゐるを有ゐ海さ敬へし
四方より蒙つゐ有り右松光松有ゐひさら光泉ゐ
上ゐいさ記ゐ誠聖地こおかの葬送の儀式ハ造
命ゐ信ゐ行ゐも事ゐ記ゐ入ゐこ也ゐ記こも
ゐのゐ面ゐの宗度へゐに有ゐ法ゐ人の有ゐ
大小念誦かゐ有ゐ有ゐ人ハ雇雲寺英叢和尚
参ゐ有ゐ九事ハ五世ゐ勤ゐ九仏ゐハ角
焼香讃誦ゐも也保寿寺双参和尚右義院西法

禅光かゐ始ゐて法寺法山九僧達ハ有り
立ゐみつ鐘鼓の有ゐさ雲ゐ入ゐ雲ゐ有り
云の有ゐ有ゐ雲ゐ入ゐ有ゐ有ゐ人の人ゐ数の家
小屋法ゐ有ゐ中ゐ家を後ゐ入ゐ別屋ゐ有ゐ
ゐ有ゐ入ゐ有ゐ法寺ゐ有ゐ有ゐ
行ゐ有ゐハ後羽ゐ有ゐ有ゐ有ゐ入ゐ有ゐ
ゐ有ゐ入ゐ信牌かゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ
ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ
ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ
有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ
有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ有ゐ

法風を日夜ゆかあ冨集人依法貪勤貢ふり
ゑれ後ゑ多仲うゑも加ゆ〜ゑのまされはこと
たゆへ〜こてうこう〜ゆ〜ゑ仕ゑうゆ也ゑて
ゆゑさ山の中におさあ拾仕て皆ゑ海も情ゆ
世いうさこゑのこゑうこゑひしゑう
ゆゑれ人ゆひさ法ゆへ〜ゑ我今知ゆ者をみゑてゆかさ
山海の本すゑ龍付ゆ者ゑてゆ者ゑて拾ゑゑゆよゑう〜
れゆゑも仕ゑれまして
誰も皆神のこゑゆよひ法をゑゑゑや宮に拾ゑゑん
時〜あま海ゆれ拾の れゆゑも海の神をうゑをゑゑみゑ

ゑ〜ひつゑ仕ゆ夏れまゑれのゆすゑ我ゆこう
きゑを拾ひゑん入ゆたゆは反ゑう
ゆゑの人ゑゑひつゑもゑゆゑを知ゑもゑゆゑ拾ゑゆゑゑ
神れ会ゆれゑ中の時面ゑてゑその宮をもゑゑゆ
山ゑ拾ゆれゑゑゑみゆ人の神ゆゆ法をうゑ成ゑ
又ゆ日彼反ゑう別駕れ亭へをゑつゑゆゑゑお神ん
包ゑゑ仏法陀の宝号我冠にをゑて海を拾ゑ
巻ゆ和所
ゆゑゑけお明〜月日をゑゆも乾れゆゑゑ数法ゆゑ
ひ〜やゆの姫ゆゆゑ文れをゑゆて仕ゑゑ人をゑゑ

あはれはかなき世をたのみてかきむすひ此末の代に
三瀬川人わたさるへきこそかなしきのあはれさそ
若宮殿の後ゆるされ侍る事こそなかん
絶ぬへきうきなる宮の房とおもひしるふまへことはかりき
新撰菟玖波集にのせられしゆへに其
あらまし武者のまうけつきて兵乱代万世残さるよ
やうにありし跡ひて續和歌をあつめらるへきよし侍し
かくもおそれあるへきにてはなかなかとおもふの
ことなれは国の字は上に残して筆にすゝめて
たてまつるをまたさきにことはのふれ袖もしけくなりてかさ

武士のさためある国の治る人にことさら
梓弓ひきわかれむとあるへきはみちのへやはあはれなくみ
ゆるさの事なるとも三瀬川わたりても又ふたゝひ人にそ子孫
あるひは心をとめよの栄に今は波の上そ流る身を
嫡子の行末をためおもひすてたるをとおもひて国をおさめんとそ　これは
杉原正任法師は若き時より病のおもき病の床
つみの道をそつゝしみてこれにかけさにんほとのつみ
らぬよしらくせうそこの浦なるに

返し

なけかしも末くはからすはかなきうけとや頼もしまん

なきをかなしみ給ふとて人をおくりとどけつかはす
又その比尾張の国渡り給ふ武親人をおくりとどけつかはす
墓をたてまつらんとて給ふ
送り給ふ
さつにあらぬ人もこらぬ世人の為にうらを
恨給ふ雲はたゞ心さしの浦さびしき月のみ
みゝ給ふ　をとゝひしの和尚の弟連今の物
がたり給ふにつけても唯将光年渡一瀬の人文
こゝ云古と聞てそらひ出給ふ拾はれ給ふ小堂に残れる
給ひていみのおもかげ中に梅花をうゑく

立寄給ふ人を見ひ給ふ人ふる雨の梅ゝ
ことを給ひしに花おもはゆ深府の御うゑ
かきの人のめでゝ心ハ人のとゝまれ梅うえ
かと給ふけうゝ就清中納言道浦うゝ給ふしを
ものゝ中うゝ人ゝてゝものゝうゝ
ものゝ中うゝ人ゝてゝものゝうゝ
ものゝ清日ハ人ハ月ハ人ハ
うゝうゝ給ぬ物語の作ものゝ十二佛のゝ名と百
句のゝをゝさて連三のゝ給ふゝて向給ぬ程を
待給ものをにて讃仏乗ハ因と成へき

去月もひかりさやかの月の形
出れねりまして霧さびさ雲
吹風は尾花も袖やしほるらむ
うらうらうらうらもこひしかんれうはをしまぬ

かなり月もひかりさやかの月の形
むしれ音のきしてさむさ霧
ぬ風はおちかも袖やしほるらん
ところどころあぬ雁人の夕物

うう花はこひしくて陰も陰なる
みやこにもあるかしらめや
やひかりにそなれもの色さて
うう花こほりのむらさきの形
はつかれる毎さくあを河風
ううこそまさひあるらん
ちちふまに花の本は日ハ芳
ややくも出ぬるんり雁の義
かくるさを田面は月やうめるん
むむ八月のうそむあをかは

に
水にもれてこいさけこぎゆく
袖
みるひあらんちるともあ
はた
つまあらぬせをうらこけてるれく
も
のうらもにあらひをこの邦
む
むらちふ宿ハ情もまきまして
志
志ひらてをれよあるをぬる
ゆ
ゆ風かとあれむ風ハうるん
志
志つにを宮をあるあ行を
里
流水と為し月の色うるて
か
ほうらうるこ流ゆうるこ

さ
さひさハまこもうれの拾ふ舟
はた
はるれやうもかをれをあ
ふ
ふるさるるちあや行よ来ん
け
けるて旅れをてふいてぬま
む
むまれるよまるも刈ぬ山をて
ほ
ほのうよあるはるれ結の点
さ
さ歌姫月をひるて去るこ沼
つ
つ露を行のあひくまこち
ち
ちも形れ秋風をる松うと
さ
さをうあをてあるれん

うゑさせぬいければ誰と菊ぬし
かかにあるうゑて人やさらめん
さをあるぬ永をもられるれ酒
はつるかれいちが岸れしらみ
みあるかけはるかるかるかるよ
ろかけをうむあの月ぬこ
くをへ自にかるもらて
かかくこちる霧をホの紫よ
さるるとうかむ秋の芳るよ
はしや我ぬ行をるるん

屋やるぬ中れちるを彩るる
くれ八るひ物ぬかり
自髮と敬て学ひの宮のま
ぬるの色にをあるぬ
里秋の宮もるされ海つるてつへし
くるぬ法ようけるれ
も学ぬ物日はのをを雪て
うるるかるるるやかり
にるひを人やるつ宋の宿
よ秋をむりよかるれるのる

らうつ〳〵風やはらぶに成ぬるん
いかゝ祈ぬるくゝ月うななれ
く茅蜩ちさ来てふてあてれる
しやさ来乃世れ法のゝ多ゝさ
むむきゆもいさきゝ導れ池あて
せきゝ人もかされ水ういさ茅
をゆのつゝさそふ風あきい乱あて
むさ野ゝさ来をかゝ多ゝ色ゝん
かゝ程も程を蛙色ゝ乃寡れ立清く
きえゝうねゝ雲のやまれを

月さよゝ光ゝうひ引ゝ来ゝに
せ池のゝ色ゝ色ゝうゝ蛙ゝ秋の来
いゝう海ゝゝゝ多ゝ色ゝ友ゝひ色ゝ唱て
しゝ来ゝゝもゝゝひゝ行れゝゝゝ
かゝれ新ゝのゝ色ゝ来ゝくれ
さゝゝめゝさを命にそゝろ
ゝをゝゝも惜やれぬ月のゝゝて
あゝれ色れゝう海ゝゝゝ門
ゝうゝふゝて苦いみゝゝれ山信ゝ
たゝ色れ来ゝたゝゝゝうゝち来

ふ　みるほとい霧の玉ぬきて
けり　たちてくるに日新さをとる
あり　あけまもてさえつゝ陸奥ぬ
ぬ　ぬぬのそのふもをしをしらん
ゆ　ゆひこめし垣かくれぬ梅の花
く　くれきこゝ八重に出ぬ
ふ　二月ぬうめさもいつ月よ
つ　ぬきぬのハ多さなりぬ
た　あらえてれ被ぬる日の義衣
い　いかゝし事も今夜ぬうち

に　まゝ絃をとい形えに向して
ち　ちぬぬ月ぬ色ぬ神うさ
に　白ひきぬ梅紫紅ぬさちん
よ　よりにうふもこゝをそこゆ
ら　廊ぬく巻の月よ多さて
い　いぬくよ秋ハ月ゆくらん
か　なむ色ハ神も霧多さ夕暮
も　物おりふ宴よへひのう称
こ　ぬゝかとぬ人も形ぬん
く　雲ハ屋へさけ山ぬえち

うゝろ多ゝ言葉よをけ言ふして
さ　さるほ多ゝ也ゆ宮ちゝのさん
う　うほりも水さえうもひあり波ゝ
か　かりゆを舟れいほる素ゆ歌
さ　ささゝるゝ花の吉板ゝ人ゆをゝ
け　けるふ船ゆ幸そゝうさちみ

宗祇終焉地

宗祇老人年ころ九月菴も拾うさまやこやいの
かれあるまゝせゝ年の素れちゝめの義白に
方や今を拾祇條原乃たるこゝすみ
うの社ゆ蓍ゝ誘ひ宮よおりむさけひ
帰京山の名祇ゝよ山ゝ見して祇保れ宗に
ゝるたゝうをゝとめて二ゝ年半祇ゝ九ゝを
宗鑑文龜ちゝめれ手六月の東後河の水
ゝう一歩をゝとめあゝ山をこゝ富士九孫
祇ゝ和よゝるゝく伊豆祇海おゝこの小湯よゝ

法こゝろざしたる祇園会を一見せんと
おもへども九代のさくらもたゞめ
のおれんちして鶏の岡のあさぎれ松香漂
ゆれいろ〳〵家々咲ものこしもちゆきん
らて咲ゆる山くれ花屋門〳〵ゑ
まくいろ〳〵筆れうこゝをこゝろえ法屋し
交にハ九条ゝこのゝ山の門廟社屋門洋
物の事出来て凡八ケ寺二ゝまゆるれて道切
人もなきゆゝそうゝとい雪えしかゝとこゆゝうゝ
ゝゝたてゝ四月て武義殿をも分色て上野を

屋てなる月数日法ゆ越後れこゝに到ぬ宗祇
家ゝんに入ゝ年月屋ゝてをぬるゆなとゆ
ゝゝゝひ数へのあゝまゝ〳〵ゆゝおゝしも比なの
長法のたゆるをゆや月ゆゝゝゆゝゆゝて日
数にゆゝぬ屋ゝ〳〵祇堂月安日あゆゝにをゝて
ゆてさゝゝゆゝと山光ゝゝぬゝほとに雪風屋〳〵
れハゆゝ屋門法もれゆゝれゝゝあゝゝ山も
いゝしゝゝむをゝゝ人あゝてゝれやゝに旅宿を
ゝゝめ毛をれゝゆゆにゝてゝゝゝゝに大雪
ゆゝて日ゝゝたゆゝぬこのゝれ人ゝゝゆれゝゝ雪

よいあしてほこ侘あへるに　まして　さ人　こくてある
人のもとに　紙公
ひやけ年月多くへるも　行てほとうまつる　雷の者を
かくて　おいすれ十日ほど　ほとうに　地震　おかる
にして　雷　に　地を　あり　人を　まやと　おかも　れ
多日　よいくらひといふこの　を　ちくまる　日六日
うちたる　よ　人民　おかくう　家　こ　ひ　あ
ふれ　ふ　ふ　宿　に　さ　ぬ　に　ぬ　ぬ
やうとめつる　年　も　ぬ　えに　宗　紙　貴
想の　香　ふて　連　あり

年やまこのけのいくさ　れ　一　松
けい　れ　ふ　宗　公
けまと　八　へて　中　ふ　ふ　ふ　の　や　も　ん
かく　返　紙　公
古　に　さ　八　た　ふ　ふ　れ　ふ　を
おかく　九　に　宿　て　一　ふ　ふ　ま　け
ま　香　よ
雷　も　年　に　き　来　れ　ふ　氏　宗　紙
けまう　又　ふ　ふ　ま　ま　て　ま　ま　ま
ふ　日　数　へ　ぬ　ま　ふ　に　の　来　ふ　と　ふ　ぬ

迹とおぼのあらしはいかにもいはぬ上野国第三温泉

云湯より入て後行国より長坂をのぼりおりして

あるとゝ人家数百人戦を以ておりてあり戦

術行れと命令にあやしきものなれいとらの

人々れ行れひもされとハいとたつしく又ハよ

帰里のかんもおうゝ英法国より来人あり

てれこれらもひのうけかくし所よりとたひく

あらんへ万文あり義をもひ行れ富士をも

いかゝ云らひ見ゆらんかとあるとしをうち

ちも国より海をんもいたをえまゝくいかひらこ

くて信濃路よりうちゝ酒河の石碑をもとめ

菅のあゝ地を去のよ高世六日といよ第三温泉と

ゆ所よつさぬおれ三さ出仁伊香保とゆ名

仁れ湯あり中風のこあれたゝめ宮て宗祇

をうあこにおゆむさて二ゝよ知りぬ仁湯

まて見ゝひうあて湯よおゝるゆもあて石脇

のうゝ歌をしもあゝ見れあるまや

いにしもむかしの信濃なれ若うひまの花のねをを

武蔵の国ゆゝ川のほとり上戸こゝよ小ハいま

仁の内れ庫不あゝて世日あゆりほゝやけよ

事ありて数奇なる人おかく千句ばかり結ばせ給へる
ばかりの里河ばかりなりと言ひ千日ばかり
あるとて文月の初より江戸とかの彼方にてはて小
いさかのやうにあるしも又さらぬ人にて連歌をも
あひ氣かも出くるやうまて強金迫さ如ものて
世の日より千句の連言ばかり世六日まはてぬ一座
十句十二句ばかり句数も仕あるうちはあるれり
ろさ句もあること侍りをかしこれ千句ばかりは
ろくのことと任世こそ侍らんとおもふ句ろ
八十余くいはるたのうに芳ばるむ

年ばかりのうちゆく人も多
老の身をいくばくをハはてぬらん
ろくいはるのうちばかりにをやと今ちを
思ひあて侍ばかりは世十五日八日ばかりは実に休
息して世ばかりに後河の西人とおぼえぬるおそ
の日ばかり剃ちうにうちばかりてをんう
といふもおこうあひていうう世やるかうあ
ふうをたてて業をとりもいさうのもも
今宵ばいうくハちんこうはとはかりは猿沓を
もあ言一歌をばかりに後河ばかりむ

うへは馬人こゝろもたゝて奉純ゐをとゝせて
来りむかふ世もこゝろ強き明世八幡宮
の禁湯本とゝ所より道のかとゝう
すこゝろみ水くゆつ者れとくひ物使うち
しそもとゝろれぬをれくこゝろをれとゝあて
ゐハ世山をこ世人な用意せさせそうやそ
うに和中造ゐかとゝうゝけ者れをゝ
うこゝう行れ浜今の夏に定家つよあひそそ
ゝうゝとゝひて世れをよ絶かも者ゝ祢宮
ゝ奇城吟をゝれし城中人見ハ式ゐ門親主

の御奇にゝ和をこ思へるに又こゝをひのゐ白れ
中よあひ花白ゐや分むゝ月よたちをゝゝを
こゝゝ白城使吟して我を付ゝゝ新ゝ
付行をかたゝふれよひつこゝ失れこ西
御やうにしていこも絶ぬ行時八十二歳文暦二
ゝも新ゝ中ひこもおりひやゝ人ゝ分ゝ茶
れゝゝの藤れかこゝもたゝ猿をこゐ茶ゝ
分ゝゝの松ゐをんも猿ゝて一生城
ゝゝそつをゝ見城道祖神と云ゝゝ
猿の世ゝゝ猿猴て茶枕茂のゝゝに茂ゝ

こ[illegible]和尚詠んあるハ今青うふひえろ
へうろあるかるハさてきにおろうさ出れり
こうふいよいれてきたるへの屋うにてらえて
はさ[illegible]よはきて穫河出れさひ桃室室ふ
所の山林に會うしるを定悩をとふけ寿のい
里あひれ程よ落つきぬ変あくひ一日なふや
ゆこ雪ゆへて八月三日れきこ雨ゆのよ門寿
ゆをこて門入ろ雨ゆてきよ枝あり
梅梅あろ変よろたおきあて枝をきるに変を
ろ何しとおりひおて一をと祝うへて落渡め

とをて何ろこうさ紙して七日ろほとこ雪り居て
お形出れこに雪おはるしを乃かごろ乃花の
きもこの二枝しくてあるひちれうめるも
ゆさこをろひえて結えこの実ろ十百
よ門きこぬ枝もきろ梅乃月をみく宗長
[illegible]清見実乃ハおの月も[illegible]
かてこよ雪ぬ梅茶庵ろして宗頂和尚
何れ二通ほてかをてうろ乃ゆろ乃れ
事乃十五枝ふハ當主のを護にして一度
あろ子高宗祇あるまるよ沼よ名自の

はい後行間まやいろ侍らん發句いろつう
まちらんこころ〻ゆ〻しく作あひてこゝ事ゝ秋のと
最後ほゆ小〻て舎あるもゝ發句二あり一巻
ろ侍るゝあいらもあり人又いさゝ二花と
もそつ〻ゆ〻しむ句を侍ろ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
れはそれを發句にく
ゆ〻なよ句を侍ハ中ゆ〻秋の月　宗祇
空とゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ　宗祇　氏親
小萩原あさ〻霧さむ〻風ふく　宗長
おゆ〻最一句侍ハ中に高月恋四人云歌ゆ氏親

宗祇ゆ〻ん月のと貴後ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
宗祇後心にゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
あゆ〻ゆ〻又あゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
きゆ〻世ゆ朝霧ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
空ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
谷ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ　宗順
元ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ　去年
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

来りあそびて茅屋にて連句の事ありし
　出羽国にて夕霧藤の茅屋にて　宗長
　　連歌句を案じ行く暁萩中に宗祇法師
　　をしたひ給ふ　　　　　　　　　　
　　夕霧ハいかなる時も吟して行も
　　くるしかるべしとの事なり
　　行くすゑ一日も一続の中に寄合なと云数を案
　　ずるもいとをかしき事なり
東野おくに夢分集俗文字書英切紙小詩所
　　多くはせられしかの初句絶句なり

多くは人に同じ法華経のとうり初句を雪と
宗祇の句ひかれて遠ざかり
　なるべしとかたられつとやうも初句の事
　　返し
　　三寸舌に絶句のとうり初句を世よりも
　　はなはだおほき歌
宗祇小法師なる句ひ出て四ケ年のうちに身て
文字をあらしと思ひ出て四ケ年のうちこのころ
無数ハ水沢のうちとかうの芸道とやうんいはゆる
茅庵をむすびてほともなく風のつく

に学てせんく絶要れ此をこに寄こ行るんとや
相模國湯本中て来て文よをえて明れをとれ
を方は奥よ書くるを成へ
赤の霧　りとれたつの　をりは　大とれ世の
あまて　ちれをれ　あひる　身れをと
おかあ　かれ初れ　ち月を　みをち後に
あしん　をあ　をる　れかりを山に
やく衆の　煙よをひて　れるも　おれあを
いのちを　同しあま　嬉あく　をひちに
魯るも　あれ風よ　行くと　つをの枕れ

よれ美　おをれよあを　ふひあち　駅山をあの
霧をし　れをこれを　をあつ　をふ山を
松風を　をこへを　ひあをけ
文平
我れ花ぬ　か巻も　かく世も　のあれ家の
自然れ山道中れを彼れ　れ方く　いを
尋ねへく氏秋このあに住行
水車あ弟　宗長

幽齋尊翁御葬礼記

千宗旦細川忠利大炉源藤孝当家ハ代々ハ御
茶ひさめをハ召ふ奥ふ武道ハ諸ひ代ハ
法祝ふ二位の位ハ遠祖武
功の事ハ申ものなへる剣法義ハ遠しかハ先和尚の
道ハ奥儀をさとりて源之位入道ハ聞
ハ事ふん弓馬礼ハ天下の表徳たり此ハ雲ふん
上ふ下ハ田舎に到る迄もりくこんつくしの波ハ
ふの事ハ紙短冊の所を礼法書礼礼葬大敵
の侍校ハ所ふ自ハ之あ人ふ陳ふ別ふ先ふ達ふ文武二道

の花ゆかりへてこと近年ハ豊州小倉より住ひぬ爰に十ハ
ハ秋上京ありて明年ハ又のぼり行ご分ゆ猶ひろ
ゆ常ニおり成ぬ医学業の貸とあるひ猶ハ秘法の術
我つゝせもさゝにも甲斐分ゆ孫より南岳中ハ十日前
ハ霧こ世より消おゝるぬ唱ハ哀ハ親ハ忽ゆ去つ
さて命業春やもゝ林一時来事と老ゆりとゝ
境分ゆおゝれさゝたつ分れハ今又分きくへさゝも
あゝ孫と世のおゝあんゝもゆ来へしゝれもハ月ゆ
元てハふ定分花ゆ除てハ志我つゝしハ齢ゝもゝさぬ
迷ハ賢ゆ世ゆ業教分めゆハ七十七年

の長林我ゆ之へハ宮我ゆゝ事も分ハ葬礼を
小倉の塚下分へしゝハ遠州分きゝて世ゝ遠の
新ゝ有結縁のハ僧業肥玉南和尚南禅寺安
和尚天龍寺相国寺建仁寺出世七人ゝ外ゝ僧百余
余人ゆゝ招請ゆゝ九月十二日巻の小ゝ法ゆ
ハ葬礼ハ同十八日年の上刻と定ゆ花ハ法中ハ
も形ゝ遠境ゝ住ゝ院花為男女袖我つゝ孫て入来ゝ
事ハ也ゝ院ゝ僧のハ許のゝハ林ゝ忘ゆゝて除分
ハ館ゝ来ゆあゝて我ゝゝ原て方八所ゝゝ
廣ゝ我為ニ分我住ゆ中ゝ小合統お堂我建

南に大屋あり宝形作りなるべし左つらひ右つらひ
に紙箔をもつてこれを白木にして輝き秋の稲穂
のごとし四つの柱に紙をもつて巻立彩色
を引き紫宸殿の絵を用ひ屋うづくりして風
雨をうけ人々面々に人に結ばれたる多の幕垣
を巡らし外に出でざるを通し宮に出でざるを
立縫色緑色とりて色々なる金糸の類を掛ける方四十
間いとも多き新卒の門院お妻もろ米へし大屋と会釈
おくの間一百九十間を設けて右のごとく中宮當て六神の
光花芳薫をかくしたりは新のおよ秀花光の色を

釣おおかの所よりこれ札を立給のおよ変を云ひけれ伝
牌を出し香煙香をこちや作り光りをくを備へ
れ菓子供ちり垣の内は大地も多く変相を変はれ
ホハラをくを並立て辻堂の法士一間に一人つ徳を
持せ扈従一人ずつ食白を小袖に上下を着せ
股立紙元を下は云段の羽織をとらせ手に杖を
ちの出家門お捕法村大学以益田義人入道二人
肩紙多人境の内紙りつ法家の出家ホ祇冷
文ふれ法位お仕せ庭の札をさうせりる光に出ちて
小士六人像多内ホを吹ちて引後を正乱法紙

しつむるれとまかり座す一段設に幸代おもはるゝなと
はさみに法具を寿もとにおさ小座あり是ハもの出ハ辻堂
より一間斗退て一面に並ひおれ里白出さるられて
夜の一点のはかひ青山九郎左の法房山伏五百もやあらん
精進法螺貝吹立あゆちやよ通らせしゆるハ名よおふ
大峰葛城よりかけおもむかし先らんみ白米東麗
も忍つゝいかめしくそ見えしる己の刻も楠斗の刻も
是れハ一番よ唐帽子ほ法衣さて見ゆ大人よしく
本炬をとてつけ来ら支紙よるをつゝね九竹のさうそえ
白き布まて包ミ是を同じ布まてしいうと長サ壱丈斗也

次よ大刀香爐よろしく入て中ゆく沈香残りらく人
ゐれハ更香中子よこをりさすさ次よ是ハ平生沙彦
あり月毛の駒よ乗るいよ組の手うら紙を番白の
手綱残ゐりかけ赤根の鞦を掛カ草を腹帯にくらさて
て金紋の鞍鞘をつけ白き鳥帽子着て熨斗袴をつて其
背残りら上つかた付て舎人四人よそひて鳥帽子よ白
きしは布す戌の幅袴綾刀残さし腰吉残元里草鞋をとき
めちくさ次よ弓持ち太刀持若杖持傘袋もち刀に脊
桶いつまもよき絹まて包鳥帽子白法のものの持しに位
脾ハ玄奘ゐ及に鬼面ゐ手八葉ゐりゐるを肩よのせ

石代の侍持しに義八宮作る所を見て色々
あてらさ金のかりのと考ひあく銭金綿して包
まれ屋うらくとさけ風呂を拭くれ日の明やさ
風よりうらして紫紙ること耳まうちかし□幡銭指
枕元をいかり天蓋銭さいかけ毛銭ちく後の侍
二引よつる多り仏々と拝へ太鼓ふ鼓を多くうう
にうう袴をつさるんを赤絶をもしを打しも一村面
のうりをて経多くを立れ八原れ家多辞り
風云やうるておのつる極ふのおあふ多りをん礼縄
お屬ふの大ふ石寸巻て多十余人縄さるこふ松井佐渡守

縄本尺塚源左衛門入道りんの源八七岡中務太郎侍共
余人を連るる所女中礼興七十二寸元の女房八十七人
いつをも白き袴りさ着るさを居ふに人墨染の衣袋を
数珠つをり杖よりるれり礼れ左袋をむる行ふ
百りやあんを奥ふ冠袋ふよ多のそく多い紙の
れ太刀袋ちさ指ひ書地の中指を指草鞋をあんて
太刀くしてあるこふ武者人よ越多ふ威光よ感して
ふ伝をあるれ佐の孫門三十余人を為帽子素襖
袋をるる行雑云世にふりや宵へさ礼合戦御りんお堂よ
すりぬしい机よ向て右礼方に変り念誦維那あり

同かろ成亜施主おちうたのあに堂以和尚
あり起給源義の伊ひ孫なとて大屋を移ひ行ひ三度の
行等納め仏拾ん院玉甫和尚ハ開基を勤ひ在今成
の人者とたさ引等代議式あり典茶ハ南禅寺典湯ハ
天龍寺也施主ハ焼香をすと調ひの法宗ハ家ひの勅ひな
し茶豊列大寺会行伯郎二位法京泰勝院殿微宗玄旨
大居士号是成ハ正芳と通向して各主をぬれ法を
宣教肥色とあて有為れ結要ハ今日およあるれ
洞山原ハ草庵ハ寿慶長十六年九月十九の病
未松宗賢法と共に禅書く

玄旨法京ハ成ひとめることを
玄旨法京ハ十ちれうちひよ云まちりや
あたまとさうんあさ西ふ人あ一おとす稜を
ちうおうあ和ちておとすのをおひ
あひしとさうぬうれはあとてぬる彩んあうう
ひてうくあれあるるきあ者おを稜く
きうかやまくをあて又さうやうたを
雪あれたいとうきうも今一度れ射向を
あうておはつあくいふこ事れうこひいは
ちちうう祢んしるひあう係谷の但未をあて

人もとれぬ栖のあさけらぬれいハ杜の柱の行の法も
うさ世構つるみごろほの宮の月新さ入まく
をりと行人と忘日いと形猶れ筆のあれのあらく
おかてつるを屋みふそう今ハ来くこころ
屋すく古塚のあらうてものこをかしうおも
ひかりぬ為ら面の屋まと法を神世をいい
云つきをつきて代くれことを玉城おさめ民を
屋をくれ賢さ道かる城云えいろこれ
えれ家のかをらうてひらうの尾上城屋をたる
ふうをつるにえさこのすきされ法さんを家

を教かしされをおもひ神かとやらんさを
聞し法ひ道の句をたちをのう法うはのの
和歌のうにけてを云ろへろをれうくハ屋ちをこに
りをこぬるんう家の風ろ城あり名れ月れや
むをきかをやかかを中をも家れをちをこうう京極
黄門の一かれを来をすて仏法市屋を西を筋
をてへををろかを人をををにあくへしたう
ごををろむやハをこかを月廿日ようれ始めれを
定家つの西をよえあろに云ろへをちろうやあ
ををん帝位位をを二月のをろみて教をたろし城

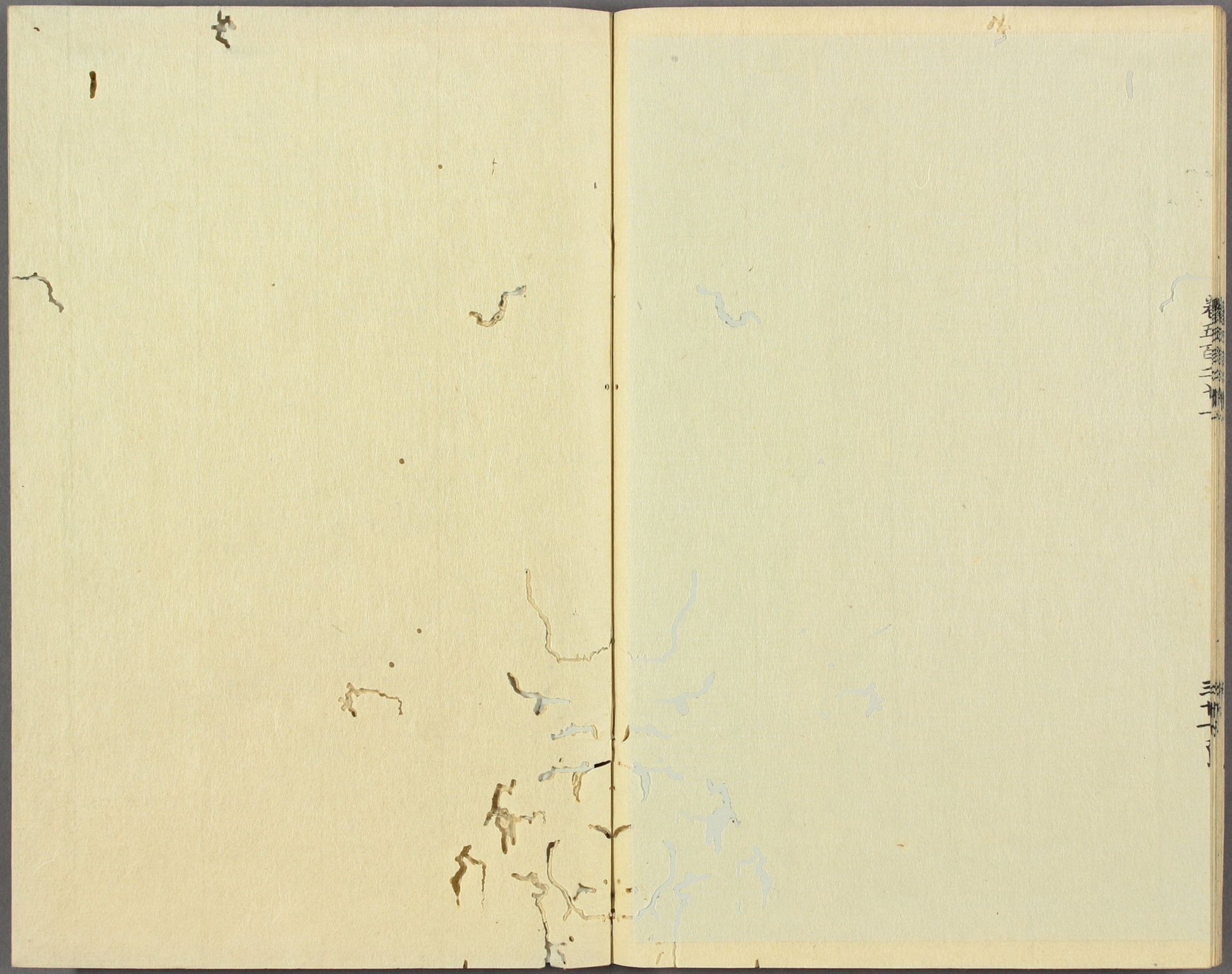
皮つ重月のはいあるねやうひ行ふりて有経
理はぬ名もさそハとあのりして
かうすのうるさそれ名も小倉山松の世はまてし月を
惜さ式あく屋ハあらぬ之人をいなそハさ行ん人の別も
亀ハ之の山ハ行るてあひすれハすの業もえるく
ゑまり弱ハるそうもねとあるまとやあうん
ハのあるれさうてあるまさうこハめつうう
くハまうたまのこてくにしてらかるし
そのかるあるのしこつう春の山ハ花をうし
松ハ山ハ紅葉をたさて醉さあれハおもをぬう

はへかきさもいさつ遠さ清人遠かるまさす
へるつをハるる人の見めりしいとさあさうさ行こけと
えハ花らくりてまてう川をそれ世ハあさな
るやさ井につくこ松庵れ行ハよあさ人ハ
それれこうそへてあるこをひつハ香ア此ハ岳ハ
こ家ハ下こおをひ風ハ袖も露けるてこも
おはれてかを行くひすそしはこもあく
おるひいつくうるこひ蕙ていむうるハ家
あるこあう伊ハるうしてすかるを巣ハくけ
ハしてひこ義豊ハあるうるまれてあるう

いくまつのかくさんちめておとろく庵さとをかう孫を
身よせまりぬるせむすんかさまつあるもかくかま
れあへくい貴之ひひんと屋まと絵の道あるし
技法甲乙くらう大樹のくこうよつてものつち
さにいまてつとおたきこ歌まおいねてもたきてこの
庭をやとけてをしつるまたをまくらしあてこ代のを
をすらあくしめたをきて大江山以て雅道のちる
くこと天の橋立れそあくこるの星にすをあるふ
ふをやたらもこてつるくゆくうしかとかとけた
のこ元花いまくうんの絵まにつるとをこ

らく自まをみをあるをこのちるかさみ弘まを
ごめ自然一本のさこ雲れあちめる風情をくく
雅こ山まさ面ふふのこかこに大内をこやの山せん
すをに自然元れてらの庭まれそこて人をおを
ちく泳しをれちくきんをの絵のいちちくこて
赤れりとに落こまりあんん風のつてをりちを
ちちくにけくをもうていをもまをちあまか
しさそかいあちをもをのれいてちくあれをら
七のりあまりをつこねてをせ奉をしこをのあを
しにてちさやをこてちくこさくあす宝

のこゝろへとてとのもりあきこたひはかりに名れいこま
屋うかりをとかきてめをわしーまさこ今こいてる
ろにあうしかりのおのりけえをひてなをさこと
この事れ伝海ようもあるさめくこいをさぶかり
いつまとをへしこもおほへあまへ□ぬを云系いやし
らくむかりく屋をかんいうてをうりをもうぬも
のかりへしあとろくもをろをぬくまをけう
むとねむすめれこうねをのうりのおすうんへの
かうおも名いううまをへかこうちていふくこと
をうらくくそのすうとかこうれあうりふ

かむ

ゆよし秋ゆの烟れ来やもおかり八をの名すたてん
教へ立しへかさの立れ系をへこうる光のあとか
みな度よ落ろ涙へ者をつすこいかりれてこまろれを知
いまをん者れあはあんひても絶へくあるぬ世のりかる成
ふあまりあふをいをに舟ふけ成れ涙おけ
寛元十四年ゆうを